

針は惱ましげに動いて、何か、叫くやうな音が慄へてゐた。ほんの二分ばかり、驛の時計に遅れてゐた。彼は、それを再び衣囊に入れて溜息をついた時、向ふの暗い隅に、影のやうに踞まつてゐた男が突然聲をあげて、彼の方へやつて來た。

『やあ、兄弟！』

明三は、懼えたやうに後退りながら、彼を凝視して、微かな叫聲を立てた。

『あゝ、貴方は……。』

それは、四人の連れと一しよに地獄を逃げ出した木の瘤のやうな顔の監視者であつた。

『兄弟も、彼所を出て來たのかい……。そして、何所へ行くんだえ。』

『ハコダテへ。』

『どんな風で出たい。』

『舟で……。』

『へえ。うまくやつたものだ。俺等あ、とんでもねえ山の中へ迷ひ込んぢまつて、三日目に、驛へ出た。所で、誰一人金はなし、皆死ぬ程も、腹が空つてゐるし……。その間、何も食はないで、歩き通しだからな。ほら、あの通り褌衣一枚きりさ。漸く、皆の金を集めて、二錢……それも、』

源が一錢五厘と、廣瀬が五厘よ。それで、おからを買つて、豚のやうに食つたんだ。そして、そこで皆お別れだ。』

『ほう。そして貴方は……。』

『俺は、K町で石屋の家へ、雇はれた。今日も、その事で、この石山へ來て、日を暮してしまつたんだが……。外の奴等は、どうなつたか……。』

その男はそして、も一度しみじみと懐しさうに、明三の顔を見つめた。

『兄弟のやうに、何もかも解りきつてる人間は、騒がないんだが……。俺等は、惨めだぜ。あのほら、足のちぎれた奴は、此町まで這つて來て行路病者救護所には入つてゐたんだが……。』

彼は、一週に一度巡廻の警官に、自分の足の事に就て何か言ひ出さうとした時、ひどく叱られてそれつきり黙り込んでしまつた。そして、遂々そこを投り出されてしまつて街を彷徨いてゐて、自分を支へてゐる事も出來ない程、すっかり腹が空つてしまつて、浮浪犬のやうに、路傍の空屋の軒の下で死んでしまつたのだつた。

『それは、……。』

『いや、彼も可哀想だつたが……。まだまだ、ひどい事もあるんだ……。あのほら、川口よ。』



それは、頭へ鶴嘴を打こまれて死んでしまった奴だった。その屍は、K橋へ来て引かかった。警察は、その屍を解剖して、死因に就ては何の疚しい所もないと断言した。これ程明瞭な傷だ。何の疚しい事がないものぢあない。その屍は、唯普通のものやうに假埋葬されたのだつた。

此、立派な人々の間には、人夫など、死んだ犬程の價値もないものだといふ、一致した人生觀があつたものらしい。事實、どんな浮浪者でも、遂ぞ犬以上の取扱ひを受けたらうとは、考へるのも難かしい事だつた。

別な屍は、手足を縛られて、全身打撲傷で、めちやめちやになつてゐた。然し、此人間も唯「面倒な死人」として、雇主の手に引渡されただけの事だつた。恐らく、其奴等は自殺した事だらう、自分の手足を縛りあげてから、めちやめちやに自分を殴りつけたり、頭へ鶴嘴を打込んだりして、自分の軀が、自分自身に役に立たなくなれば、きつとこの犬共はそんなつまらない悪戯をし、自分を殺してしまつた事だらう。

そして、御丁寧に自分の首へ石塊まで結びつけて、川へ投げ込んだりした事に、違ひない。

警察醫とか言ふ立派な人等は、メスでその皮をめちやめちやに、鯛のやうに引裂いたり、ピンセットで頭の中を掻きまはして、ひよつとしたら、そこに血や肉の代りに、埃か、襤褸でもこの奇異

な動物には、入つてゐあしないかと、探した事かも知れない。

何と言ふ、覺りすました偉い人たちだらう。

そればかりぢあない。皮肉な屍は、川へなぞ自分を投り込まないで、丘を超えた百姓の土地へ、坑を掘つて這入り込んでゐた。そんな奴も、二三人もゐた。その土地を持つてゐた百姓は、秋耕の爲にかけてゐたプラオの端に引かかつて、その連中が出て來たのを見ると、道具も何も地へ投飛したまゝ町へ來て、その土地を賣飛して、何所かへ行つてしまつた。屍は、きつと冷笑つてゐたことだらう。

その男は、眼前に敵でもゐるかのやうに、皮肉に言つた。

『俺等は、どうかかうかして、彼所を這ひ出した。また見つけた屍も、それでよからうよ。然し、あのほら、トンネルの中の墓坑の……』

彼は言竦んだ丁度その時、且驛どまりの下り列車がは入つて來た。

『ちあ、さよなら。健在で暮しねえ。そのうちにまた、會はうぜ。姉御も、可愛がつてね……』

その男は、薄笑ひして彼に言つて、汽車に乗り込んだ。彼は、唯一人暗い待合室に残されて、宛然胸をしめられるやうな、悲愁に閉されてゐた。



然し、三十分経たないうちに、上り列車が来た。彼は、椅子を立上つて、そこから總ての同僚たち、さよならをした。死んだ人々にも。

然し、時子にだけは、ふと考へて口を噤んでしまった。そして、衣囊の中で、固く時計を握りしめて汽車へ乗り込んだ。

## 三九

晝前に汽車はB市に着いた。

明三は、故郷へ還された流刑者のやうな氣で汽車を出た。

うら悲しい曇り日の空の下に、街は佗しく沈んでゐた。彼はその街々を懐かしげに見ながら歩いた。街路樹のボブラの葉は落ち盡して、ひよろ長いその木立は、梢を風に吹かれながら、寂しく立つてゐた。家々は、疲れ果てた人のやうに、路傍に踞まつて黙然としてゐた。

彼は、自分でもよく解らないやうなことに思ひ悩みながら遂にS町の宿へ歸つて来た。明三は、然し、その扉の所で、立止つてしまった。老婆の室の入口に、踞まつて何かしてゐた老醫師が、ふと顔をあげて、そこへ来た彼を見て、何か死體でも見るやうにわなわなと慄へたのだつた。

『歸つて来ました。』

明三は、低い聲で言つて彼に手をさしのべた。

『さうですか……。』

醫師は、然し恐ろしい蹙面をして、物も言はないで彼に顔を反けて、戸外へ出てしまつた。明三は、泣き出しさうな顔をして、その人を見送つた。

『やあ、先生！来ましたね……。』

誰か、突然彼の背後から肩に手をあてて言つた。明三は、振りかへつた。そこには、古洋服を来て、短く刈り込んだ腮髯を立てて、全然別な格好をした磨師が立つてゐた。

『やあ……。』

明三は、彼に一つ頭をさげた。

『さあ、あつちへ……。娘さんの所へ……。あの人は、どんなに待つてゐることか……。』

磨師は、彼の顔をじつと見て、微笑してそこを離れた。明三の聲を聞きつけて、菊子が出て来た。少女は、彼の胸に飛びついた。

『兄さん……。』



明三は、黙つて少女の手を握りしめて、雪子の室へは入つて行つた。雪子は、その時眠つてゐた。彼は、彼女の肩に手を捲いて抱き起し、その額に接吻した。

雪子は、眼を覺して、憎えたやうに自分を抱いてゐる人間を見たが、急に微かな叫聲を立てて、ぶるぶると慄へ、狂氣のやうに彼の唇を吸ひつけ、その首に手を捲いて強く締めた。そして、聲をあげて泣き出した。

明三は、幾度も幾度もその髪に接吻して慄へる指で頭を撫でた。

『兄さん……。』

菊子も、彼の肩に掴まつて、顔をおしあてて、泣いた。

『どんなに、どんなに待つたことか……。』

そして少女は、嗚咽に吃りながら言ひ出した。

『姉さんは……。』

明三は、哀しげにそれを遮つて言つた。

『宥してね。雪さん。……菊ちゃんも……。』

『あら、そんな……。』

少女は、彼の肩を揺り動かした。雪子は、まるで熱の發作でも起つたやうに慄へながら、彼の腕の中で啜り泣いてゐた。

明三は、そつと彼女を寢床の上に横たへた。雪子は涙の底から凝然と彼を見つめながら、慄へる聲で言ひ出した。

『あゝ、私……。でも、よく来て下さつてね……。眞實、眞實だわね。今度は……。眞實に、私に、

歸つて、来て下さつたのね……。』

『眞實、眞實ですよ……。』

明三は、きれぎれに、低い聲で答へた。

『あゝ、ただ……。私、……。死ぬ、のよ……。』

彼女はまた、急に悲しげな顔へ聲で呟いた。

『……。』

『死に度くない。死に度く、ないけど……。』

明三は、耐へがたい恐怖に襲はれたやうに、唇を慄はして彼女を見た。雪子は、苦しげな息を吐いて眼を閉つた。その睫毛の中から溢れるやうに、涙が流れ出た。暫らくしてから彼女は、軀を腕



くやうにして、悶える聲で呟いた。

『あゝ、どうしよう。』

そして、耐へられないやうに眼を睜いて、さめざめと泣き出した。

『どうしたの、雪さん……。苦しい……。』

明三は、自分が物言ふことを恐れてでもゐるやうに、恐怖と言つた。

『私、私、……。死ぬのよ……。唯一人で……。』

彼女は、咽び泣きながら、執拗にその語をくりかへして、彼の手に縋つた。

『また、そんな……。姉さんは、気が狂つてるんだわ……。』

少女は、叱るやうに言つて、顔を反けて、聲を呑んで泣き出した。

『起して、頂戴……。』

雪子は、暗い坑の底から救ひを求めらるやうに、彼に手をさし延べた。

『ね、起して……。』

そして、彼の膝に掴まつて、頭を擡げた。明三は、恐ろしい怪異な生物をでも見るやうに彼女を凝視めてゐたが、遂に抱き起して、自分の胸で、彼女の頭を支へた。

雪子は、頷れるやうに、彼の胸にその軀を委ねた。そして恐ろしい坑の縁に掴まつてでもゐる人のやうに慄へながら、明三の眼に見入つた。

『あゝ、私、どんなにか、あなたの胸を待つてゐた事だらう。でも、熱つてゐる胸だ、こと……。息苦しいやうだ……。』

『……。』

彼は、黙つて、自分の胸の中に彼女の頭をあてて、その肩を抱いて、悲しげな顔をしてゐた。『そして、何か、何か話して下さい……。』

明三は、然し、すっかり自分の言ふべき事を忘れてしまひでもしたやうに黙り込んでゐた。

『地獄の話でも……。ね、貴所のゐて来た……。』

『……。』

『お父さんは、どうして来ないんだらう……。私呼んで来よう……。』

菊子は、獨語のやうに言つて、そこを出て行つた。

『あの、醫師はね、私に憑いて殺すのよ。』

少女が出て行くと雪子は、急に惱ましげな顔をして、ひそひそと言ひ出した。



「あの人は、毒を盛つて、私を磨めて、些しづゝ迫め殺してるのよ。」

「そんな、……。あの人は、どんなに雪さんを助け度いと骨折つてる事だか……。」

明三は、何か深い憂ひに沈みながら力ない聲で言つた。

「いゝえ、然うぢあないの。それあもう、恐ろしい人よ。私の生命を蝕ふ……。」

青さめた顔をして、醫師が入つて來た。彼は、宛然泣いてでもゐたやうな、汚れた悲しげな顔をしてゐた。そして、ちらと彼等を見て身を翻して立去らうとしたが、またわなわな慄へながら、

明三の側へ歩いて來た。

「一寸、酒場まで……。私と……。」

彼は、囁ぐやうに言つた。

「酒場……。何故です。」

「私とでは、飲まれませんか。」

「そんな……。だつて貴方は遂ぞ、一度もそんな事を言ひはしなかつたのに……。」

「ハ、ハ、ハ、……。叱らないで、下なす。」

醫師は、彼等の視線から顔を反けて、空虚な聲で笑つた。

「行きませう……。」

明三は、立上らうとした。

「何所へ、行くの……。」

「酒場へ。」

雪子は、憎えたやうに訊ねた。

「もう、私の所から、去くの。」

明三は、醫師に眼で訴へた。然し、老醫師は、暗い壁の方を向いて、何か獨言してゐた。

「私は、すぐ歸つて來るよ。」

「いゝえ。貴方は、行つて了ふのよ。きつと……。」

「いゝや。然うぢあない。」

「然うだわ。ちあ、私も連れてつて。私もお酒が飲み度い。」

「然う、ちあ行かう。ね、一緒に……。」

雪子は、聲をあげて泣き出した。

「貴方は、私が起てない事を知つてるものだから、そんな、事を言ふのよ。そんな……。」



「ちあ、止めるよ。私は……。」

明三は、困惑して吃りながら言った。

「行つてもいいわ。行つても……。」

雪子は、腹を立てて嗚咽してゐたが、然し急に沈んだ寂しい笑を顔に泛べて言った。

「行つてらつしやいな。でも、早く来てね……。私も、暫く、一人で、靜かに貴方の事を考へたいの。私、息が苦しくて、死にさうなんだわ。」

明三は、彼女の臉に接吻してから立上つた。老醫師は、彼女の顔を見まいとでもしてゐるやうに遂ぞ一度もそつちへ視線を向けずに、そのまま戶外へ出た。

## 四〇

彼等が行つた時、酒場では恐ろしい混亂の中に何か大聲で喚き立てて、泥酔者等が争つてゐた。二人は、ずつと長い路を然うして歩いて來た通りに、黙りこくつて、惱ましげにその扉口に立つてゐた。

「何だ。豚ども……。金持が皆泥棒だと言つたら、どこが悪いんだ。ちあ貴様等は、金持ちは神様だと言ふのか……。」

その聲が、きれぎれに叫んだ。誰かが、その壁の隅々に立つて叫んでゐる男に、カッブを投げつけた。空瓶が飛んで行つて、壁にあたつて碎けた。悪罵と喚聲が、暴風のやうにその男を襲つて五人の男が彼に掴みかからうとした。

その男は、ひきつたやうな歪んだ笑を泛べて、両手を高くさしあげた。

「犬ども……。吠えあがれ。噛みつけ……。貴様等は、自分の……。」

その男は、嘎れた喉一杯の聲で叫び立てた。

「いけな……。」

どこからか、突然現れて來た磨師が、叫びながら、その間へ飛び込んで行つた。

「何だつて、そんな事をするんだ。手前等は……。これは、石ちあねえぞ。この人は……。焼酎の瓶でいものは、道路の石に叩きつけるものなんだ。」

彼は、その石と人間とを誤つた連中を、その男から押退けた。

焼酎瓶で頭を割られかかつた男は、あの編輯長の山口だつた。

「やあ、貴方は……。やあ……。」

彼は、磨師に何か言ひかけたが、そこに立つてゐる明三を見つけて叫ぶやうな聲で言った。



明三は、走り寄つて彼の手を掴んだ。彼は、痛い程も明三の手を握つて、喚くやうに言つた。

『やあ、藤田さん。あなたは……。あゝ、その、そ、……。』

彼は、何か吃りながら、涙を流して呻つた。

『あなたは、その……。僕は、今此奴等に、この犬共に、』

『何だと……。』

誰かが、その連中の中から叫び出したが、まるで木片かなぞのやうに磨師に跳ね飛された。

『努力の掠奪者の事を説明してやつたんです。所が、所がこの豚共は、自分の味方の手に噛みつかうとする。……時に貴方は、あの地獄で今まで、その……と暮して、来たんですね。その、ふうむ。此奴等には、その話よりも、一枚の銅貨の方が、有りがたいと言ふんです。それよりも、その金持が……。』

『然うよ。金持は、神様だつて買ふ事が、出来るんだ。』

暗い壁の隅この方で、誰かが怯々した聲で言つた。

『ふうむ、豚に、眞珠を投げ與ふるは……つてことがあつたつけ。』

山口は、獨言のやうに、愁はしげに言つた。

『それあ、ね、議論は食はれませんから。』

醫師が、冷笑を顔に泛べて言つた。

『ふうむ、……。』

山口は、椅子へ頹れるやうに坐りながら、醫師に喰つてかかつた。

『議論は、喰はれない。と、言ふんですね……。貴方は。』

彼は、眼を光らして、自分の右の手を高くさしあげた。醫師は、咳入りながら、呻くやうな息を吐いて彼を見てゐた。

『僕は、貴方のやうな紳士でないから、喰はれないやうな、議論は……。その……。』

『紳士……。ふ、ふ。』

醫師は、不気味な冷笑に顔を歪めた。

『私は、その喰はれなくなつた人間の食物が、どこにあるかつてことを言つてたんですよ。つまり、盗まれたものを、取り返せと。解りましたか。掠奪者に、自分が呻きながら手傳ひして、自分の所有を脊負せてやる事が、要るものかと……。』

彼は、急に言葉をきつて、また涙を流して、振りまはしてゐた自分の拳で眼を拭つた。



「あゝ、然し惨めな人々だ。あの人等は、そんな理由さへ理解ない程も、餓と疲労との桎梏に挫かれてしまつてゐる。」

彼は、自分の顔を両手で掩ふて食卓の上へ打俯した。

「ハ、ハ、……、早く、自分の足の肉までもやつてしまつて、自分は石塊でも頭を叩き割つて死んでしまつた方がいゝ。何を、自分で働いて、喰つて力んでゐるものがあるんです。こんな娼婆に……。」

醫師は、くどくどと泣くやうに言つた。然し山口は些しも、彼の語を聞いてゐなかつた。

「汝等、衣を賣りても、劍を買ふべしつてえ時なんだ。今は……。若し、賣る衣がないつてんなら、石でも拾つて殴りかかるがいゝ。」

彼は、空虚な居酒屋の、汚れた壁に向つて叫んでゐた。然し、そこには、誰もゐなかつた。彼等は皆、何時の間にか出て行つてしまつて、そこには彼の相手の誰も残つてゐなかつた。彼は、舌纏れしながら、烈しく壁に頭をぶつつけて、その長い板椅子の上へ仰向に倒れてしまつた。

「それは、それは、然うさ……。」

磨師は、獨言のやうに言つて、溜息を吐いて、そこへ坐つた。山口は、何か謔言のやうに舌纏れ

しながら呶鳴つてゐたが、遂に床の上に頭を落して、呻りながら眠つてしまつた。

三人は、そこに坐つて別々な心でこの男を見て黙り込んだまままづさうに酒を吸りはじめた。

「……………」

醫師は、黙つて苦い毒薬でも呑むやうに顔を歪めて、酒を吸つてゐたが、何か深い物思ひを断ちきつたやうに急にカツプを置いて、深い息を吐いて言ひ出した。

「六塵悪まされば、置て正覺に同じ、とかつて貴方が話した事がありましたね。」

「……………」

明三は黙つて、猜疑深さうにその人の眼に見入つた。

老醫師は、何か深い陰謀を企ててもゐる人のやうに不気味な眼をして何かに憎えたやうに怯々と周囲を見まはしては、きれぎれに謔言のやうにそんな事を言つた。

何か重大な事でもあるやうに、ひそひそ聲で……。

そして、長い間を経てから、また空虚な聲で言ひ出した。

「あなたは、その……死刑に立會つた事があるさうですね。」

「えゝ。」



明三はまた用心深く、彼をじろじろ見た。

『どうでしたか。』

『いや、大變愉快でした。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、……』

突然明三は發狂でもしたやうに笑ひ出した。

その、響きのない嘎れた笑ひ聲は、宛然咽び泣いてゐるやうだつた。

『あなたは、……いや、……然し、そんな人間ぢあない。……そんな……』

老醫師は、顔をあげて、じつと彼に見入りながら苦しげに言つた。

『ちあ、どんな人間なんです。』

明三な意地悪い冷笑ひをしながら、言つた。老醫師は遂に両手で頭を抱へて低く跼まり込んでしまつた。

磨師は、彼等から顔を反けて、もう薄暗くなつた壁の方を見て何か呻つてゐたが、遂に大聲で奇妙な朝鮮人の唄をうたひ出した。それは、沈んだ寂しい歌なのだが、彼の聲はひどく嘎れて、きれぎれで、彼は唯吼えるやうに怒鳴つたのだつた。

『止めてくれ。止めてくれ。何だつてそんなに、嗚鳴るんだ。』

醫師は、哀願するやうに言つた。

磨師は、洋服の衣囊に両手をつき込んで、立上つて壁面をして出て行つた。

二人は、遂に顔を見合してまた苦しげに顔を反けた。そして、恐ろしく長い間、息つまるやうな苦惱の中に、黙り込んでゐたのだつた。

醫師は、もうすつかり酔つてしまつて、噁をしながら、ふらふらと立上つた。二人は無言のまま酒場を出た。明三は、醫師の肩を抱いて、固くその手を掴んで、宿へ歸つて來た。

## 四一

室の前まで來ると、醫師は急に立止つた。そして、明三の手を離して、彼から二足ばかり走つた。

『つよたら……』

『何故……。貴方は、何所へ行くんです。』

明三は、潛えたやうに聞いた。

『靜かに……。お寝みなさい。』

醫師は、力ない聲でそれだけ言つて、暗い戶外へ出て行つた。明三も、彼について歩き出さうと



した時、室の中で尖つた雪子の聲がした。

『何所へ、行くの……。』

明三は、叱られたもののやうに俯れて、彼女の側へ歸つて行つた。雪子は、あの時のままの形で、両手で顔を掩ふてゐた。

明三はそこへ坐つて心配さうに言つた。

『老醫師が、どこかへ行つてしまつたから……。』

『あの人は、貴方に何なの……。』

『……。』

雪子は、顔から手を離して光る眼で、彼を見つめた。

『ね、……。』

明三は、それには答へないで衣囊から、ウキスキーの小壺を出した。

『あら、お酒。』

雪子は、もう恐ろしい長い間それを待つてでもゐたやうに、手をさし延べた。そして、何もかも忘れてしまつたやうに、その壺を撫でてみながら獨言をした。

『あゝ、いゝ色なこと。ね、これで、頭が痺れてしまふんだらうか。』

『飲んぢあいけなくて……？』

明三は、彼女の頭を自分の膝の上に抱へあげて、栓をとつて、唇へ口をあてた。雪子は、二口ばかり吸ると口を離して、眩暈でも感ずるやうに、眼を閉つてゐた。

そして、長い間を経てから、熱い息をついて、炎のやうな眼を睜いた。

『おゝ、毒藥のやうだ。苦い炎のやうに胸にしみる。』

彼女は、獨言を言ひながら、凝然と彼の眼に見入つてゐたが、苦しげに言ひ出した。

『私、このまゝ死んで行き度い。これで……』

『ハ、ハ……。さうね。酒に酔つて死ねるものなら……』

明三は、空虚な聲で笑つて、呟いた。

雪子は、彼の膝に顔を伏せて燃えるやうな息を吐いてゐたが、そのまゝ眠入つてしまつた。

日が暮れてから、どこかから、菊子は歸つて來た。彼女は、寝てゐる雪子を見ると、寂しい微笑をして、忍足に明三の側へ歩いて來た。明三はウキスキーの瓶を彼女に振つて見せて、低聲で囁いた。



『飲まない……』

少女は、暫時何か考へるやうに彼を見てゐたが、聽て力ない聲で言つた。

『いやよ。』

『何を考へてるの。酔へば暴れ出すからかい。』

『まあ、私、そんな事ぢあないの……。あのね、兄さん。』

『何……。』

『いや……。姉さんは、よく眠つてるのね。姉さんは、飲んだの……。』

少女は、彼女の顔を覗き込んで、その唇に觸つてみた。そして薄笑ひしながら明三の顔を見てゐたが、彼の頬を指で一つつゝいて、逃げ出した。

『何所へ行くの……。』

菊子は黙つて何か、自分だけで微笑しながら、隣りの室へ走つて行つた。

次の朝、明三がやつと重苦しい眠りから疲れた頭で眼覺めた時、そつと忍び足に菊子が這入つて來た。

『手紙が來たのよ。』

明三は、それを開いてみた。それは、彼が二ヶ月も前にT新聞に「浮浪の子」といふ短篇を送つてあつたその原稿料が、二十圓、證書送達で届いたのだつた。

『兄さんは、何時起きたの。』

『今。菊ちゃんは……。』

『私も、今よ。』

『……。』

『兄さんの所へ、あの手紙が届いて……。』

『FAN……。』

『ほうら二人で書いたの。』

『ええ……。』

『何時……。』

『四五日前に。』

『まあ、あれは、一月も前に出したのよ。』

『地獄まで來るんだもの、長くかかるさ……。』



明三は、起上つて薄笑ひした。

『きくちゃんの、父さんは……。』

『此所で、寝てゐるの。』

少女は、自分が寝てゐる室を指した。

『何故。』

『だつてね。姉さんがさう言つたのよ。どうぞ、私の軀の上から、貴方の手を退いて下さる……。』

『雪さんが……。何故そんな事を言つたの……。』

少女は、困惑したやうな顔をした。

『私、解らないけど、きつと姉さんは、病態がひどく悪かつたからよ。』

『お父さんは、腹を立てて、行つてしまつたの。』

『然うぢあないわ……。泣いて彼所へ、行つて了つたの。でも毎日姉さんの所へ来て、坐つてるのよ。』

少女は、悲しげに言つた。

『でも、よく私があそこへ行つた事が、解つたね。』

明三は、暗い顔をして言つた。

『それは、私周旋屋から探り出したのよ。ほら、寺の小母さんもあそこへ行つてるつて。事も……。』

『きくちゃんが……。』

『然うよ、私よ。悪くつて……。』

『……。』

少女は、首をかき上げて、笑ひながら言つた。

『だつて何もかも、姉さんが探して来いつて言つたんだもの……。兄さんは、昨夜……。』

少女は、何か言ひ出したが急に口を噤んで、黙つてしまつた。

『なあに……。』

『まあ、私、どうしよう……。』

少女は、両手で赧めた顔を掩ふてしまつた。

『どうしたの。菊ちゃんは。』

『言はれないこと。』

『何故……。言つて御覽。』



「だつて……。」

「いゝよ。」

「あの……。姉さんと……。」

「姉さんと……。」

「寝たの……。」

「何故、そんな事を、訊くの。」

「……………」

明三は、そつと顔をあげないでゐる少女の首をつゝいた。

「あのね……。姉さんが、言つてたのよ。」

「何て……。」

「兄さんに抱かれて、寝たいつて……。」

「……………」

明三は、掌に、硝子の破片でも刺れたやうな顔をして、黙り込んだ。

「怒らないで……。ね、兄さん。私、悪いのよ。」

少女は、彼の手に取締つた。

「然うちあないよ。菊ちゃん。僕は……。」

その時、雪子は、何かに憎えたやうに眼を覺した。菊子は、立つて室を走り出た。

## 四二一

それから、一時間も経たない間に、菊子はまた何か明三に話しかけてゐた。

「そして、何所へ行つたの……。」

「檻獄へ。」

「檻獄……？ 自分でかい……。」

「いゝえ。その晩ね、仲間のふりをして刑事巡査が三人も、は入つてゐたの。」

「きくちゃんは……。」

「私、逃げたのよ。」

「よく、逃げられたねえ。」

「中で騒ぎはじめたから、私そつとそこへ行つてみたの……。そのうちに燈火が消えてしまつて、



真暗い所で、掴み合つてるのよ。だから、私はすぐ前の空家へ逃げ込んで隠れてたの。」

「然う。うまくやつたね。」

「でも、お父さんにはその方がいゝのよ。檻獄の方が……。」

「何故。」

「だつて、御飯は無料だし姉さんが苦しまないから……。」

「苦しむ……。」

明三は、呻くやうに言つた。

「磨師は昨夜歸つて来たかい。」

「歸つて来て、寝てるわ。」

「何所で……。」

「お婆さん所で。あの人は、お婆さんのお婿さんになつてるのよ。」

「婿に……。ほう。自分で潛り込んだのか。」

少女は、笑ひ出した。

「二圓二十錢の、抵當に取られてるのよ。」

「抵當に……。何て妙な事をまた、あの人はしでかしたんだらう。そんな金を、お婆さんから借れたのか。」

「然うぢあないの。ほら、飲んだくれてるものだから、宿賃が拂へなくなつて、そんなに溜つたのよ。そしたらお婆さんが、あの人をその代料で引取つたの。」

そこへ、突然宿の老婆がやつて来て、じろじろと彼等を、見はじめた。少女は、憎えたやうに口を噤んで、黙り込んでしまつた。

「あの、保険屋を、見なかつたかい。」

老婆は、嘎れた聲で、明三に訊ねた。

それは、やせこけた偏儀の小男で、黒い帯のついた襦袢外套を着て、そのだぶだぶした頭巾を、すつぽり頭から被つてる奴で、何か考へ事でもあるやうに懐手をして、首を縮めて町を彷徨いてゐた。

何時か、此男の職業の事に就て止宿人等が言ひ争つた事があつた。事實、彼は何をして食つてゐる人間だか、誰にも解らなかつたからだ。

磨師は、きつと小盗人だらうと言つた。磨師は、何か狡猾い事をして世渡りしてゐる世間師に違



ひなひと言つた。然し、鞆面をして黙つてゐた鑄掛師は、もうそれに相違ないと言ふ風に、一本の指を立てて重々しい聲で言つた。

『彼奴は、保険の金を集めて歩いてる奴だ。』

彼が、どんな保険の金を集めて歩いてるんだか、誰にも解らなかつたが、彼等は、その時から此男を保険屋とよんだ。

『知らないよ、私は……。どうしたの。』

『居なくなつた、金を持つて。』

老婆は、わくわく慄へながら、言つた。

『あの人は、金を持つてたの。……お婆さん。』

少女は老婆を見上げて、叫んだ。

『俺の金を……。』

老婆は、唸るやうに言つた。

『盗人奴！』

そして、自分の頭髪を、がりがりとかき撚つた。

『お婆さんが、盗んだのかい。』

そこへ、通りかかつた、老害れた鑄掛師が、彼女に訊ねた。

『何の事だ。そのあつちこつちさ。俺は、有りたけを持つて行かれた……。』

老婆は、歎息して言つた。

『ほう、妙な話だ、俺はまたその、あつちこつちかと思つてた。所で、誰がまた物好きに、そんな事を、やつたものだ。』

鑄掛師は、鞆面をして言つた。

『誰だか……。』

老婆は、口を尖らして呟いた。

『へ、やつぱりお前さんだらう。誰が、手を出す譯がねえ。』

『だつて、あの保険屋が、見えなくなつたんだ。夜中に……。』

『保険屋が、ちあ、彼奴が集めて行つたことかも知れない。』

鑄掛師は、出て行つた。

『あれは、そんな保険屋かね。』



明三は、沈んだ聲で、誰にともなく呟いた。

「然し、何所か、棚の下か襦袢の中にでも、入ってないの。お婆さん……。」

少女は、憎えたやうに言つた。

「何所にも、……畜生！ あの罰當りの盗人大奴！」

老婆は、両手を振りまはした。

「いくら、あつたの。」

「それは、一、一圓、八十錢……。襦袢の中も、戸棚も、自分まですつかり裸にして調べた。運の悪い日だ。何だか、こんな事が来さうに、すつと前から思はれた。畜生！ 遂々やつて来やがつた。」

老婆は、泣き出しさうな顔をして、くどくどと呟いた。

然し、そこへひよつこり保険屋がどこから歸つて来た。彼は、だぶくした頭巾の奥から、人をいぶかしさうに見た。

老婆は、彼に氣がつくと、まるで狂犬のやうに飛びかかつた。

「こら、畜生！ 畜生！ 盗人奴……。金を出せ。」

保険屋は喫驚して、老婆を押退けながら怯々と言つた。

「だから、婆さん。もう些し待つてくれつて、昨夜頼んだのに……。俺はまだ、いゝ仕事が見つからないんだからね。」

「何だ。糞！ 宿賃の事ぢあない。手前が昨夜俺の所から、盗んで行つた、金の事だ。」

老婆は、彼の外套の襦袢を引撈りながら喚き立てた。

「盗んだ。と、俺は知らん。それは、何かの間違ひだよ。」

「何の間違ひだ。」

「何の間違ひだか……。俺が、盗むなんて、へ、……。そんな……。」

保険屋は、吃りながら辯解した。

保険屋は、そして、素直に一人ですつかり裸になつて、その襦袢外套を彼女の眼の前で、振りまはしてみせた。

無論、そこからは、何も出なかつた。

「空虚だ。空虚だ。何所へ隠して来た。」

「私は、知らないよ。お婆さん。」

「よし、畜生！ 隠して置け。今に、何も彼もあばきだしてくれる。」



老婆は、飛び上つて自分の室へ走つて行つた。

老婆は然し、自分の室へ入るとすぐに、躍りあがつて、叫聲を立てた。

『あゝ、あ、有つた、有つた。』

その時、何所かの隅から醫師が顯れて、黙つて彼等の側を通りぬけて、外へ出て行つた。彼は、顔を反けて一言も誰にも口をきかなかつた。

老婆は、手を叩いて片方づゝの足で躍りながら、彼等の所へ出て來た。

『有つた。有つたよ。』

彼女は、そして頭を振つて跳ねながら、唸つた。

『何だ。人を裸にしたりして……。氣が狂つてるのか。』

保険屋は、ぶつくさ呟きながら不快らしく、また出て行つた。

老婆は、懐へ入れて兩手で抑へてゐた財布を出して、そこへ踞まつて調べはじめた。彼女は、そしてその地面の上へ、有つたの小紙幣を並べて見て、終ひには、何かぶつぶつ言ひながら、空虚な財布を、倒にして振りまはしてみた。

彼女はその小紙幣を徹くちやにして掻き集めると、また躍り上つて叫び出した。

『なゝ。なゝ。』

『どうしたの、お婆さん。』

明三は、煩さそうに訊ねた。

『八十錢きり残つてないんだ。一圓紙幣が一枚、消えてしまつた。』

老婆は、また手に掴んでゐた紙幣を、一枚一枚調べはじめた。そして、何度もそれを繰り返しながら、ぼろぼろ涙を流して泣きはじめた。

『あの保険屋奴！ もうあれに違ひない。浮浪犬野郎。これは、これは……。』

老婆は、ぶつくさ叱言を言ひながら自分の室へやつて行つた。そして、一つの棚の上へ蠟燭を一本點して、立てた。彼女は、その前に跪いて、兩手を取りしばつてふらふらと頭を揺り動かしながら、何か低い呟くやうな奇妙な呪詛を始めた。彼女は、奇怪な靈媒をやる妖術師で、この陋巷の人は、彼女を蛇婆とよんで、薄氣味悪がつてゐた。

腫れ上つた重たい足でも曳するやうな、不氣味な沈んだ聲で長い禱りが果てしもなく續いた。そして、遂には、譯の解らない唸るやうな歌をうたひ出した。燈火は、消えたやうに隣き歪んだ齒と齒との軋めきあふやうな、氣味悪い謔言のやうな歌聲が、四邊を暗くした。彼女は、歌につれて烈



四三〇  
しく珠数を押揉んだ。その蛇の頭骨や、狼の牙や、病犬の骨などを縛連ねたものは不気味な、醒す  
るやうな音を立てた。

歌が終ると、ぶつぶつと何か譯の解らない言葉で、その燈火にむかつて話しかけた。黄色っぽい  
白臘の灯は憎えたやうに戦慄した。蠟燭は遂に燃えくちて、盡きてしまふ。老婆は、咳きを止めて、  
床板へ頭をつけて長い間身動きもしないでゐた。

彼女が、起き上つて、溜息をついた時、恐ろしく青ざめた顔をして、慄へながら、老醫師が歸つ  
て来た。そして、灰色に氣味悪く光る眼をして、そこらを怯々と見まはしてから、老婆の室へは入  
つて行つた。

老婆は、驚いたやうに顔をあげて、彼を見た。

『何だえ。お前さんは……。』

醫師は、まるで何か死靈に憑れた人かなぞのやうに、わなわなと慄へて、きれぎれに、唇の中で  
呟いた。老婆は、意地悪く呼び立てた。

『何だえ。むやみに人を見たりして。行つてくれ。行つてくれ。』

醫師は、何か言ひ出さうとしたが、遂に立上つて足を曳するやうにして、歩み去つた。

老醫師は、出口で明三に會つた。彼は、ふと立止つて、喉を締められたやうな聲で、言つた。  
『金は……。その、私が……。』

然し、それつきり口を噤んで、涙の溜つた眼で、じつと彼を見て、行つてしまつた。老醫師は、  
その夜遂に歸つて來なかつた。

日暮方になつて、酔ばらつた保険屋が、ひよつくり歸つて來た。老婆は、無論飛びかかつた。然  
し、彼は何の譯だか、それが解らない風であつた。

『何故だ。お婆さん。』

『何故！ この盗人奴……。』

『俺が、何を盗んだ。お前さんの金は、あつたかあねえか。』

『ない。たりない。』

『知らないよ。俺は。』

『何所へやつた。』

『だから、知らないよ。』

『糞、飲んでしまやあがつて。』



「いゝや婆さん、これはあのお醫者さんに、御馳走になつて酔ばらつたんだ。あの人は、金持ちで、一圓の紙幣を振りまはして飲んでる所へ、俺が、通りかかつたんだよ。」

「醫者だと。」

「然うだよ。」

「畜生！　ちあ、彼奴だ。あゝ、すると、最前の奴は、呼出されて來たんだのに。俺は解らなかつた。畜生！　彼奴の何所に、金が湧いて來る坑のある筈がない。」

老婆は、すぐに菊子の所へやつて來た。

「出て行け！　直ぐに、出て行け！」

「何故だい。お婆さん。」

明三は、憎えたやうに取り纏つた少女の手を握りながら、言つた。

「あの、老老醫者奴！　彼奴が、盗人だつたんだ。畜生！　出て行け！　親父から金をとつて來て、返せ！」

そして、菊子の髪を掴んだ。

「私は、……お婆さん。」

少女は、慄へながら、明三の蔭に隠れた。

明三は、自分の衣囊の中から一圓紙幣を、一枚探り出してそつと老婆の手の上へ置いた。

「ほら、俺が盗んでたんだ。後で話しをするから。」

「そ、それは……。」

老婆は、びっくりと慄へた。『然し、いゝのかい。お前さんは……。』そして、それを受取ると慄れあがるやうに笑ひ出したが、急に黙り込んでしまつて、立去つた。

菊子は、聲をあげて、泣き出した。そして、明三の手に取り纏つてそこへ泣き伏した。

「いゝんだ。菊ちゃん。何でもない。何でもない。」

雪子は、恐ろしく黙り込んで、彼を見てゐたが、急に寝返りして顔を反けてしまつた。

そこへ、黙つて白痴の茂少年が、は入つて來た。

「あの、醫者の先生が、お前に、ちよつと來てくれと……。」

「あの人が……。何所におるんだ。」

明三は、少年に訊ねた。

「Wの小路の空家で……。」



『然うかい。行くよ。』

彼は、立上つた。

『兄さん。行かないで。』

菊子は、彼の手に縋つて叫んだ。

彼は静かにその手をのけて言つた。

『否。いゝんだ。』

そして、彼は白痴の少年と、酒場の方へ歩いて行つた。

茂は、一つの辻を曲つた小路の、空家の前に來ると、急に立止つた。

『ちあ。さよなら。』

『お前は、どこへ行くんだ。』

『D寺へ。』

『お前は、まだ彼所にゐるのか。一人で……。』

『然うよ。』

『……………。』

『ほら、お医者さんは、此所にゐるんだぜ。』

少年は、その空家を指した。

『お前は、一人かい。あの女は、どうした。』

『どの女だ。』

『あの女よ。』

『うむ。あの女は、ゐないよ。』

少年は、小犬のやうに暗がり走り去つた。明三は、茫然その暗い路の上に立つてゐたが、轉て、空家の破れた扉口まで歩いて行つて、中を覗いた。

『何所に、ゐますか。』

然し、聲は、がらんとした暗がり響いて、どこかへ消え去つた。その時、突然黒い影が、彼に襲ひかかつた。そして、何かの氣味悪い黒い手が、彼の首に觸れたが、直ちに闇の唇に吸込まれでもしたやうに消え去つた。後には、また再び永久的な閑寂が、黒い翼をひろげた。

明三は、用心深くその暗がり、軀を踏めて、息をひそめた。彼の頭の暗がりの中に、恐ろしく青ざめた、憎惡の爲に歪んだやうな、氣味悪い顔をした、老醫師の顔が、幻のやうに現はれて消えた。



闇の中では、微かな吐息の音さへ起らなかつた。彼は、忍び足に後退つて街路に出て、何か不可解な自分の想念に怯々しながら、宿へ歸つて來た。

『お父さんに、會つて……?』

少女は、その時まで、泣いてゐたやうな眼をして、泣きじやくりをしながら、彼に訊ねた。

『いゝや。ゐなかつたよ。姉さんは、寝てるの……?』

『何か怒つてるの。私へも、物も言はないんだわ。』

『何故だい。雪さん……。』

明三は、まだ暗い壁の方へ向いてゐる雪子の顔を覗いて訊ねた。彼女は、吸り泣いてゐた。

『どうしたの。』

『私なんぞ、死ねばいゝんだわ……。』

雪子は、深い溜息を吐いて獨言のやうに言つた。

『何か、腹を立ててるんだわ。私、悪かつたら、姉さん堪忍して、ね。……宥して下さいな。』

菊子は、彼女の手に取り纏つた。

雪子は、一言も口をきかなかつた。そして、両手で顔を掩ふて吸り泣いてゐた。

明三は、恐ろしい混乱した頭で、壁に向つて黙り込んだ。

## 四三

次の日の午後、明三が扉口へ出て行くと、白痴の茂が壁面をしてそこらをうろついでゐた。彼は、明三を見ると憎えたやうに、走り出さうとした。

『おい。茂……。』

彼は、呼びかけられると、黙つて彼の前へやつて來て、俯れた。

『あの醫者が、金をくれるつてたから、俺は、お前を呼びに來たんだ……。』

彼は、一つ頭を下げて、また壁面をした。

『ふうむ。然うか。ちあ、俺も金をやるよ。』

『何をするんだ。』

『何も、しなくつても、さ。』

『いらなく。』



暫く考へてから、茂は言った。

『ふうむ。何故……。』

『悪いんだ。それは。あの山口の大將が、言ったんだ。何か、仕事をしないのに貰つちあいけないつて。だから、誰か呼出して來るとか。手紙を頼むとか。でなければ、何か盗んでくるとか。……。』

『然うかい。お前は、何所へ行くんだ。今。』

『俺は、人を探してるんだ。』

『誰を。』

『誰でもいい。あの醫者が、死にかかつてるから。』

『醫師が。それは、どこだ。』

『あのほら、Y町の防火壁の下だ。』

『俺が行く。』

『お前が。さうか……。おかしいなあ……。行くのかい。』

明三は、走り出した。

茂は、彼の背後から、ついて走りながら、また獨言のやうに言った。

『お前、何故あの人の所へ、行くんだ。あの人はほら、あれぢあねえか……。』

『どうして、そんな所にゐるんだ。』

『知らねえ。あの石の壁へ頭を打つけたんだ。』

『頭を。』

『うむ。あの人は、あの壁の下へ這ひ込んで、めそめそ泣いてゐて、急に頭を打つけたんだ。』

『何時。』

『先刻だ。きつと頭が壊れてしまつたのかも、知れねえぜ。』

『生きてるか。』

『生きてる。壁に額をあてて唸つてるんだ。』

二人は、その防火壁の蔭の暗がりへは入つて行つた。老醫師は、血塗れた頭を防火壁の下の地面にあてて、泣いてゐた。

明三は、そつと歩み寄つて彼の頭に觸つてみた。その軀はひどく鞭打つて酷使はれた馬車馬かなぞのやうに、ぶるぶると慄へてゐた。明三は、その頭を抱き上げた。老醫師は、顔をあげて彼を見た。その顔は、見る見る醜く羸んで、癲癇の發作でも起きたやうにわなわなと慄へる手をさし延べ



て彼を押退けた。

そして、急に叫聲をあげてその傷ついた頭を引ずるやうにしてそこを漕りぬけると、狂犬のやうにどこかの小路に走り去つた。

明三も續いて道路まで走り出たが、もうその土の上から姿は消えてしまつてゐた。

『へえ。あんなに生きてたんだな……。』

少年は、獨言のやうに呟いた。

『あの人を、見ておくれ。ほら、金……。』

明三は、彼の掌の上へ二個の銀貨をのせた。

『何故だ。』

然し、明三は何も答へないで、さつさと宿の方へ歩き出した。少年は、茫然彼を見てゐたが、笛のやうな聲をあげて、老醫師の走り去つた後を、走つて行つた。

#### 四四

次の日の午後、明三は線路に沿ふてA町の方へ歩いて行つた。彼は、雪子の、菓と果物とを買ふ

爲に宿を出たのだつた。彼は然し、その事を殆んど忘れてしまふ程も、いろいろな想念に虐まれて重い荷を背負つた人のやうに俯れて歩いてゐた。

彼は、慣れたやうに立止つて、自分の歩いてゐる所を見た。そして、自分から、二百歩ばかりも前を、ひどく踏み込んで歩いて行く、不思議な人の姿を見つけた。無論それが、誰なのか彼には解らなかつたが、何か氣味悪い運命の影像かなぞのやうに、その時の自分の想念に結びつけて考へた。彼は、その背後から、急足に歩いて行つた。何か見えない、鎖で曳ずられてでもゐるやうに。

その黒い、奇妙な影像は跣足で、殆んど躡音も立てないで、歩いてゐた。明三は、幾度も立止つて、悲しげにその人を見て聲をかけようとした。然し、また力なく俯れて深い溜息をついては、黙つて歩いて行つた。

灰色な濁つた空が、重い痛む頭を地に着く程も垂れてゐた。地の上には、その惱ましい息吹が淀んでゐるやうに思はれた。

その影像が、Bの曲線に行つた時、前方からB驛を出たばかりの貨物列車が、呻るやうな音を立てて現れた。

明三は、慣れたやうに立止つた。影像のやうな不思議な男も、立止つて凝然とそれを見てゐたが、



突然両手をあげて何か叫びながら真直に汽車に向つて走り出した。明三も、續いて線路の上を何か叫びながら走り出した。

警笛は、續けさまに響くやうな音を立てた。然し、その男が、まだ十歩も走らない間に、汽車は狂人じみた叫聲を擧げながら、嘯み着くやうに、彼に飛びかかった。その、不思議な男は、轍の下で異様な音を立てて、約三碼ばかり曳ずられると、何かの塊のやうになつて、緒土の砂利の上へ放り出された。汽車は長い沈んだ泣くやうな警笛を鳴して、止つた。

明三は、まるで頭の半分を喰ひかかれでもしたやうに、茫然立止つてしまつたが、急にわなわなと慄へ出して、罪を犯したものであるやうに、線路を傳つて十歩ばかり逃げ走つた。然し彼はまた杭かなぞのやうに凝然と立竦んで、頭を垂れて力なくとぼとぼと、そこへ歩いて行つた。

何所からか、鴉のやうに群つて來た、人間の黒い頭が恐ろしく重なりあつて、何か呻きながらその死人を圍繞てゐた。

明三は、ちらとその頭の間から、まだ生きてゐる死人を見ると、低く呻いて後退りした。それは、恐ろしい形相をした老醫師であつた。右の足を下腹部から撈り取られ、その頭はめちやめちやに碎けてゐる……。その血みどろな、泥にまみれた生物は、首を撈り取られた雞のやうな異様な聲を立てて喉を鳴した。そして、眼窩から飛び出て、黄色く腫れたやうな眼球をのろのろと動かした。その碎けた手の指を慄はして、微かに自分の顔の上で揺り動かしてから、何かに縋るやうにふらふらとそこらを探して虚空を掴んだ。

明三は、人々の間から潛り込んで、その顔に觸れる程自分の顔をすりよせて覗いた。そして、つとその指に觸つた。その時老醫師はその死んだ眼で凝然と彼の眼に見入つて、息が絶えてしまつた。

低く垂れ下つた、汚れた覆布のやうな空の破目から洩れて來る、灰黄色な陽光の流れが執拗に、この凄惨な屍體を照した。

嘯み合せた齒を露出して、その唇は眼に膠着し、臉の上に粘着いた眼球は、汚れた粘々する泡かなぞのやうに見えた。その後頭部は、宛然膾のやうにめちやめちやに碎けて、碧黒い血が地面に溢れてゐた。巡査と驛員とが、ひき撈られた片脚を拾つて來て、屍の側へ置いた。ひき撈られた服の下に、血は汚水のやうに溢れてゐた。

青ざめた、煤煙に汚れた顔をして、茫々と髪を亂した機關師は、巡査に明三を指して、何か囁いた。そして、機關車には入つて行つた。



汽車は、すぐにまた惱ましげな氣笛を鳴して動き出した。

巡査は、明三の前へ歩いて来た。

『お前は、何だ。おい。此男に何をしたんだ。』

明三は、不機嫌らしくその人を見てから、慄へる聲で言った。

『私が、……？ 此男に何をしました。』

『ばか！ 俺が訊いてるんだぞ！ 此男は、此奴の背後から走つて来たといふぢあないか。』

『走つて来ました。』

『だから、貴様、何をしたんだと、訊いてるんだ。』

『何も、しません。』

『貴様は、此奴を知つてるのか。』

『知つてますとも。』

『何故、知つてるんだ。』

『何故だか……。』

『ふうむ。』

巡査は、恐ろしい顔をして、彼を睨んだ。

『此奴は、何をする人間か。』

『前の、醫師です。』

『今は。』

『今は、この通りです。』

彼は、屍を指した。

『ばか！ 醫師から、死ぬまでに、何をしたかといふんだ。』

『やつぱり醫師です。然し、此人はもう、他人所ぢあなく、自分を癒す事も出来なくなつてたんです。』

『ふん、貴様は、うまい事を言ひやがる。名は……。』

『福島……。』

『何所にゐたか。年齢は……。』

『B町の掃き溜めに。あの頭に黒い布片を捲いた老婆の宿に……。年は知りません。』

『何だつて、此奴は汽車に向つて走つて来たのか。』



『汽車が来たからでせう。でなきあ、こんな所を走る譯がありません。』  
『何うして走る必要があつたんだ……。』

『だから、汽車が来たからだと言つてるぢやありませんか。』  
『こら！ 貴様は、何を……。』

『ぢあ、屍ばいに聞いてみなさい。私も、別によく知つてる譯ぢあない。』  
『貴様は、氣狂ひか、それとも……。馬鹿奴！ 俺は警官だぞ！』

『然うだと思ひます。』

『ともかく、貴様、署まで来い。貴様には聞く事がある。』  
巡査は、蹙面をして呟いた。

そこへ、手に二つの石をもつて、茂が、人々の中をくゞつて来て頭を出した。そして、彼等を見てゐたが、遂に明三に言葉をかけた。

『やあい。掴まつたな。』

『うむ。掴まつたよ。お前、ちよつとあそこへ行つて来てくれ！ 菊ちゃんの所へ。お父さんが怪我をしたからつて……。』

『この屍骸が、然うか。』

『うむ。死んだんぢあない。まだ生きてるんだ。走つてつてくれ。』

『よし。』

少年は、仔犬のやうに、跳ねながら走つて行つた。

『それぢあ、此奴の親戚があるんだな。』

巡査は、明三を睨みながら言つた。明三は、何も答へないで、再び屍の所へ蹣まり込んだ。人々は、不思議さうに彼を見た。そして、何か呟いたり囁き合つたりしながら、そこをうろついたり立止つて見入つたりして、まるで死んだ蛇を發見みつけた鴉の群かなぞのやうに執拗に、つきまとつてゐた。磨師は、重たい靴で地を叩いて来た。少女は、彼に曳ひずられながら、嗚咽つて息を切らしながら走つて来た。

少女は、一目父を見ると氣を失つたやうにそこへ頼れ込んでしまった。

『あゝ、何うしよう……。』

明三は、彼女の肩に手をかけたが、何も言ふ事が出来なかつた。彼女は、明三の手に掴まつて烈しく慄へながら泣き出した。



「貴様は、宿のものか。」

外套の頭巾のやうな、だぶだぶした奇妙な顔の巡査は、洋服を着た磨師に、言葉をかけた。  
「然うですよ。」

磨師は、凝然と惨めにひき撈られた屍に見入りながら、不機嫌らしく答へた。  
「この娘が、その親戚か……。」

「然うです。」

「外に、……。」

「外に、何があるもんです。」

「ふうむ。誰か引取人がないか。」

「誰も……要りませんよ。こんなに引ちぎつた奴にやつたらいゝに。そいつは、ソツプでも、とる事だらう。」

「こらー」

「は。」

磨師は、唇を尖らせて、巡査を凝視した。

「氣を付けろ！」

「へえ。ぢあいらないのか。それぢあ、私ん所で持つてきますよ。」そして、彼は、さつさと、何所かへ行つてしまつた。

「貴様は……。」

巡査は、呆れたやうに彼の後姿を見てゐたが、隔まり込んで少女に言つた。

「これは、お前さんの、お父さんだね。」

菊子は、嗚咽きながら點頭いた。

「誰か、親戚はないのか。」

少女は、明三を指した。

「然うか。」

巡査が、再び彼に何か話かけようとした時、年老つた黄色つばいやせた顔の、警察醫がやつて來た。その人は、低聲で何か巡査と話し合ふと、ひどく黙り込んで死人を検べた。そして、その破れ歪んだ軀から離れて立上り、嘆息を吐いて、再び凝然とその屍に見入つたが、黙つて一人で立去つた。



磨師は、大きな煙草の空箱を、薄汚ない姿をした保険屋に脊負せてやつて来た。

彼等と明三とは、その柩にこの破れ砕けた屍を入れた。仰向に軀を折曲げて、その顔を胸の上につけ、胸の上に、撈り取られた片足をのせた。その血みどろな足は唇に觸れた。

老醫師は、何か口叱言をでも言つてるやうに見えた。

磨師は、むやみにその屍を折り曲げて柩の中へ押込みながら、何かぶつくさ獨言を言つて烈しい音を立てて、箱の蓋に釘をうちつけた。

そして、まだそこを立ち去らない群集に嗷鳴つた。

『鴉奴！ 何だつてうろついてあがるんだ。屍の肉は、ちつとも、汝等にやわけてやらねえんだ。焼場へ行つて待つてろ。すつかり焼いて中毒らねえやうにして、くれてやらあ……。』

磨師と、保険屋とはその柩を擔いだ。明三は、俯れて後から隨いて行つた。菊子は、恐ろしく蒼ざめた顔をして泣きながら、彼に掴まつて歩いて行つた。

埃を吹き捲く風が、幕でもはためかすやうに、顔に亂れかかった。巡査は、四歩ばかり彼等に隨いて来たが、そこで立止つて何か譯の解らない口叱言を言つて、驛の方へ引返して行つた。

彼等がYの火葬場に來た時は、もう日が暮れてしまつてゐた。菊子は、一言も口をきかなかつた。

そして、何か頭でも痛むやうに青ざめた顔をして、弱々しく慄へた。

蒼黒い顔をした、丈の高い火葬番の爺が、突然その暗い建物の中から出て来て、彼等に聲をかけた。

『やあ、先生。屍は、誰です。』

『ほら、此娘のお父さん。あのお醫師さんだよ。フロックの……。』

磨師は、少女を指して言つた。

『へえ。お醫師さん。ちあ、よくよくの事だ。とても癒らないほど破けてしまつた事だね。』  
『さうだよ。』

磨師は、蹠面をして、歎息をした。

明三は、煉瓦の竈の鐵の扉の下に置かれた柩の前に跪いてその人の爲めに涅槃經を低聲で誦した。

磨師も、保険屋も、そこに跪いた。火葬番の親爺は、一寸頭を下げて、壁の方へ離れた。菊子も、明三の横の敷石の上に坐つてまた啜り泣きながら、ひれ伏してゐた。

明三は、讀經を終ると涙を垂れて凝然と頭を俯れてゐた。そして、立上つて後退つた。重い鐵の扉が開かれて、壊れかかつた粗末な柩は、押込まれた。



『すつかりと、扉に門をかけなくちあ……。這ひ出すかも知れねえぜ……。』  
その時まで黙りこくつてゐた、保険屋が怯々と言つた。火葬番は、鞞面をして彼を見て扉に門を差した。

菊子は、明三に掴まつて慄へながら、凝然とそれを見てゐたが、何かの發作でも起つたやうに慄へ出して、彼の軀をしつかりと掴みながら、また聲をあげて泣き出した。

明三は、暗い愁はしい顔をして、彼女の髪を撫でた。

『お父さんが、可哀想だ……。お父さんがゐなくなつた時から、私、きつとこんな事になると思つてたのよ……。』

菊子は、慄へる泣聲で言つた。

明三は、憎えたやうに少女の顔を見て、その手を固く握りしめた。

『でも、お父さんは、死んだ方がいゝんだわ……。』

少女はまた、獨言のやうに言つた。明三は、彼女に詫るやうに頭を下げて、その敷石の上に跪いた。彼女は、凝然と彼を見たが、顔を反けてまた啜り泣いた。

彼等は火葬場の冷たい石畳の上でその夜を明して、次の日小さな骨甕を持つて歸つて來た。

『困つた事だ。これは……。』

扉の所に立つてゐた老婆は、鞞面をして呟いた。

『いや、婆さん。何もかもなくなつた。』

明三は、冷たい笑ひを顔に泛べて言つた。菊子は、聲を立てて泣きながら、雪子の所へ走つて行つて、その手に掴まつて、激しく慄哭いた。

『どうしたの。菊ちゃん。あら、貴方も……。何所にゐたの……。私、昨夜は苦しくて、眠れなかつたのよ……。』

雪子は、寂しさに疲れたやうな青さめた顔をして、きれぎれに息を吐きながら言つた。その顔は宛然暗い影にでも襲はれた人のやうに、病衰へてゐた。

明三は、そつとそこへ骨甕を置いて坐つて、彼女の手を握つた。そして、しみじみとその眼に見入つた。

『それは、何……。？ 菊ちゃんは泣いてるのね……。どうして……。？』

雪子は、潤んだやうな力ない瞳で、答へを求めらるやうに、凝然と明三の眼に見入つた。明三は、責められたやうに、顔を俯れて、黙然としてゐた。



『どうして、私に何も言つてくれないの……。どうしたの。何か、言つて下さいな。何か。』  
彼女は、身を悶えて、明三の手を振つた。

四五四

四五

忍足に、——突然時子が、は入つて来た。宛然、その破れた壁の中からも現れたやうに。彼女は、そして、そつと壁に寄つて殆んど瞬きもしないで、彼等を凝視した。彼女は、汚れた衣服を着て、宛然病疲れた人のやうな青ざめた顔をしてゐた。彼女、背後から、奇妙な顔をした茂が、やはり登音を忍ばせては入つて来た。

明三は、彼女に気がつくつと、幽霊でも見るやうに戦いた。そして何か言はうとして唇を慄はしてまた黙り込んで、凍り着いたやうになつて悲しげな眼で、彼女を凝視した。時子は然し、沈んだ顔をして、怒りに燃えてでもゐるやうな恐ろしい眼で彼を見て、一言も口をきかなかつた。

雪子は、顔をねぢ向けて彼女を見た。そして、ひどく憎えたやうに瞬く間に草の葉かなぞのやうに青ざめて慄へながら、きれぎれな呻聲を立てた。

『御免なさい。——』

時子は、その時始めて唇を開いた。些し慄ひを帯びてはゐたが、沈んだ物静かな聲で言つた。

『貴女、おかげんが悪いんですつて。どうなの……。』

雪子は、夜着の中から再び顔をあげた。その顔は、宛然死人のやうな臘色をして、腫は炎のやうに燃えてゐた。そして、惨めな弱々しい、きれぎれな聲で言つた。

『えゝ、もうぢき、死ぬでせう。』

『どうして……。』

時子はその枕許まで進み出て、冷たい聲で訊いた。

雪子は、乾びた喉で苦しげな呼吸をした。二人の女は、青ざめた氣味悪い顔をして、熱した針のやうな視線で相互の腫に見入つた。

その時まで壁に吸着いて、茫然立つてゐた茂が、突然變な聲で笑ひながら、唇を尖らして言ひ出した。

『何うした。あの死んだ父さんは……。』

明三は、脅かされたやうに彼を見て手を振つた。

『何うしたんだ。』

四五五



明三は哀訴するやうに彼を見たが、茂は關はないで喋り立てた。明三は、そこに置いた甕を指した。

『ふうむ。それあ骨かい。懐いたんだな……。』

『死んだ……。誰が死んだの……。』

雪子は、力ない聲で顔を反けて明三に言った。

『あの、お醫師さんだよ。』

白痴の少年は、薄笑ひしながら言った。

『黙つといで、黙つて……。』

菊子は、泣き汚れた顔で、彼に手を振つた。

『だつて死んだぢあねえか。汽車にひかれて……。忘れたのか……。ほら、お前に教へに來たちあねえか。俺が……。』

『あゝ、どうしよう。眞實……。』

雪子は、哀れつぽい泣くやうな顔をして呟いた。

『何も、私には言つてくれないのね……。』

『だつて、姉さんは……。』

菊子は、何か言はうとしたが、然し急に口を噤んでしまつて、また啜り泣きし出した。

『だつて、それは、反つていゝんでせう。貴女に……。そのお醫師さんは、可哀想だけど……。』

時子は、毒々しい笑ひを泛べて些しづゝ雪子の胸に針をでも刺すやうに言った。

『何故、いゝんです。』

雪子は、腹立しげに、叫んだ。

『何故だか、そりあ、私の知らない事だけど……。』

時子は、この泣いてゐる女を意地悪く虐むやうな、恐ろしい笑ひを泛べたまゝ言った。

『何故、貴方はそんな事を言ふんです。』

明三は、力ない聲で苦しげに時子に言った。

時子は、黙つて腹立しげに室を出た。明三は、俯れて彼女の後からついて行つた。

彼女は、暗い通路の壁の下に立つて今にも泣き出しさうな眼をしてゐた。

『あの時計を、持つてて……。』

彼女は、ひそひそ聲で訊ねた。



『えい。』

『然う。飲んでしまつた事かと思つた……。』

彼女は、寂しく微笑した。

『一寸、私にあの音を聞かせて下さいな。』

明三は、襦衣の衣囊から取出して、黙つて彼女の耳にあてた。彼女は、素早く彼の首に手を捲いて、その唇に接吻した。

『ね、貴方の胸の、心臓の所へあてといて下さいな。何時までも……。いゝでせう。』

明三は、それを再び襦衣の左の衣囊へ入れて、弱々しい聲で言ひ出した。

『然し、何故だい……。こんな……。』

時子は、燃えるやうな瞳で、彼を凝視したが、黙つて顔を反けて雪子の所へ歸つて行つた。

明三は、何か言はうとするやうに唇を慄はしたが、また俯れてその後について行つた。

彼女は、そこへ行くと、急に冷やかな薄笑ひをして、嘲けるやうに言ひ出した。

『……ちあ、これは、私の言つて悪い事……。』

『ハ、ハ、ハ……。』

茂は、突然に空虚な大聲で笑ひ出した。明三は、脅かされたやうに彼を見て、唇を慄はした。

『あゝ、あゝ、いやな世の中だ。』

雪子は、泣くやうに言つて、また夜着へ顔を埋めてしまつた。時子は、恐ろしい笑ひに毒々しく顔を歪めたが、そつとその病疲れた女の手を握つた。

『苦しいでせう……。』

青ざめた唇をして、恐ろしい叫聲のやうに言つた。

『あゝ、恐ろしい冷たい手だこと……。』

雪子は、宛然死の手にでも、手を握られたやうな、憎えた聲で讒言のやうに言つた。

『苦しいの……。貴女に、然うして手を握られる事が……。』

雪子は、低い慄へる聲で然し意地悪く呪ふやうに呟いた。時子は、汚ないものでも掴んでたやうに急いでその手を離して、びくびく唇を動かしたが、また黙つてやき着くやうな眼で凝然と明三を見て後退つた。

『姉や、行かう……。此所は、お前のゐる所でないんだ……。』  
白痴の少年は、時子の袖を掴んで言つた。



『然うね。あゝ、行かう。さよなら。そして、貴方も……。』

彼女は、再び刺すやうな眼で明三を見た。明三は、わなわなと唇を慄はせたが、何も言はないでゐた。彼等は、遂に去つた。

彼等の姿が消え去ると急に、雪子が耐えきれなくなつたやうに激しく明三の手を掴んで聲をあげて、泣き出した。

『あの女が、何しに來たんだか、私は、皆解つてるの……。せめて貴方は、私の死ぬ間だけでも、此所を離れないで、下さい……。ね……。ね……。』

明三は、泣いてゐる幼児をでもなだめるやうに、彼女を抱いてその髪を慄へる手で撫でて涙を拭つてやつた。

彼女は、彼の胸に抱かれたまま、嗚咽りながら、血を絞るやうな聲で呟いた。

『私は、そんなに、皆から憎まれて死ななければならぬんですか。ねえ。あなた……。』

明三は、唯、俯れて一言も言はないで強く彼女を抱いてゐた。

『菊ちゃん。』

『そんな……。姉さんは、そんな事を……。私は、知らない。』

少女は、立上つて室の隅へ行つて、暗い壁に顔をあてて忍び泣きし出した。

#### 四六

病衰へた娘と、哀痛の爲に虐まれ疲れた少女とは、燈火のない暗い室に眠りに沈んでゐた。明三は、夜の妖怪のやうに、音もなく暗がり(くらがり)に起きあがつた。

そして、息をひそめて、忍び足に室から逃れ出た。

二分の後彼は、暗い巷の路を、泣くやうに何か呟きながら、彷徨歩いた。そして、時々立止つて、俯れては何か考へ込んだ。地の上には、灰色の深い霧とともに、黎明の青さめた光りが流れて來た。街はそして、墓のやうな閑寂に沈んでゐた。

薄暗い霧の中から、何か物に襲はれるやうな、慌しい足音がして、何かの黒い影が走つて來たが、いきなり彼に突きあたつて、地面へ轉んだ。

『何だ、手前……。』

口叱言を言ひながら起き上つたのは、茂であつた。

『何うした。茂か。何だつて今頃走つてるんだ。』



「おや、お前か。さあ来い。来い……大變だ。」

茂は、いきなり飛び上つて喚いて彼の手を掴んでひつばつた。

「何だ。どうしたんだ。」

「あの女が……。」

「何うした。」

「お、痛い。膝の皮をすつかりむいちまつた。何だつてお前は、俺をつき飛ばしたんでえ。」

少年は、足を掴んで立止つた。

「ね、あの女が、どうしたんだ。」

明三は、苛立しげに言つた。

「走らなくちあいけねえ。……死にかかつてるんだ。」

「嘘だらう。何うしたんだ。」

明三は、ふと立止つて愁はしげに、然し憎えたやうな慄へ聲で言つた。

「お前、ばかな事を、疑ぐるもんぢあねえ。ほら、早く……。死んちまへば、話が、解らねえぜ……。」

茂は、怒つたやうな聲で言つた。明三は、急にわなわなと慄へ出した。そして、ひどく鞭打たれ

る弱々しい馬のやうに、苦しげに喘ぎながら街路を走つた。

「何して、そんな、事を、したんだ。」

「知らない。俺は、何も知らないんだ。」

少年は、石に躓きながらぶつくさ言つたが、急に悲しげな聲で獨言のやうに呟いた。

「あの女はきつと、……何かのんだんだ。」

「何を……。」

「きつと、き……つ……と……、毒だらう。」

少年は、走りながら泣き出した。明三は、呻くやうな聲を立てて、歎息した。

「あゝ、あ。」

彼は、弱々しい歩調になつて立止らうとしてはまた走り續けた。

「何故、お前は、僕の所へ来たんだえ。」

暫く黙つてゐた後、彼は腹立しげに刺々しい聲で言つた。

「どうして、お前……そんな……。あの女が、呼んで来てくれて言つたんだぜ。これは、悪い事か。然し、お前は何所かへ行く所だつたのか。」



『然うさ。あの女の所へ……。』

『ふうむ、不思議な時に思ひ付いたもんだな……。』

茂は、老人のやうに、考へ深げにまた立止つて言つた。

## 四七

荒廢した寺院は、柩のやうに寂然としてゐた。夜の明ける前の灰色な、微かな陽光の中に、時子は暗い壁に掴まつて、わなわなと戦慄しながら、呻いてゐた。

『何うしたの。何う……。時さん……。』

明三は、彼女を抱き起した。彼女の土氣色して慄へてゐる唇と、胸の上とには、吐き出された暗紫色の血が塗れてゐた。床の上にも、カッブからまき散らされでもしたやうに夥しく蒼黒い血が吐き散らされてゐた。

彼女は、もう殆んど物を言ふ事が出来なかつた。そして、銀灰色な、奇妙な色に光る眼で、凝然と彼を見て、何か物を言ひたげに悶えて唇を慄はした。そして、わなわなと烈しく慄へながら、まるで恐ろしい鎖かなぞのやうに烈しく彼の胸にとり纏つて掴まつた。

『水、水を……茂。』

茂は、カッブに水を入れて來たが、そこへ潰れ込んで、聲を立てて泣き出した。

『血を、血を……。こんなに……。』

少年は、指して指えたやうにきれぎれに、彼に言つた。

明三は、カッブの水を彼女の唇にきぎ込んだ。女は、咽せて低く呻いたが、僅かにそれを嚙み下して、苦しい息を吐いた。

『今、さ、ま……。死、死ぬ、のよ……。』

彼女は、嗚咽きながらきれぎれに、一言毎に苦しげな息を吐いて微かに言つた。

『何故、何故だい……。時さん。』

明三は、泣きながら言つた。

彼女の臉からも、涙が溢れて頬に傳つて流れた。時子は、もう一言も言ふ事が出来なくて、唯、唇を顫はして、夢の中の謔言のやうに、慄へる呻めき聲で二言ばかり、呟いた。

『ゆ、ゆる、し、て……。』

激しい痙攣が、彼女の肉體を襲つて來た。女は、傷つけられた瀕死の蛇のやうに慄へて、彼の腕



の中へ頹れ込んでしまった。そして、息が断えてその青ざめた、黄味を帯びた顔は、仰向に投返されて、彼の膝の上へ頹れた。

『あゝ、姉やあ……。』

少年は、叫び聲をあげて泣きながら、女の屍に取纏つた。そして、その腕を宛然引き拵つてでもしまふやうに激しく掴んで、叫び泣いた。

明三は、彼女の死んだ胸に接吻して、恐ろしく慄へながら、獨言を言つた。

『私は、解らない。私は……。』

彼は、女を床の上に横たへて、自分の外套を脱いで、その上に被せた。そして、そこに跪いて、彼女の爲に長い間何か黙禱したが、遂に立上つてそこらを見まはした。ウキスキイの空堀の側に、暗い不安な黄色をした小さな薬壺が轉がつてゐた。彼は、それを拾つて、陽に透してみた。そして、それを衣囊にしまつて、今にも、その女が笑ひながら起き上つて来るかと、鈍い期待でも抱いてゐるやうに、茫然彼女を見てゐた。

屍は、憫ましく頹れ落ちた花のやうに横たはつてゐた。

その時まで、泣き伏してゐた少年は、漸く頭をあげた。

『何故、もう少し早く、知らしてくれなかつたんだ。』

明三は、愚かしい調子で言ひ出した。

『だつて、此女がお前を呼んで来てくれと言ふとすぐ、俺は走り出したんだもの……。ほら、これを……。』

そして、少年は、左の手に握りしめてゐた、小さな二枚の紙片を彼に渡した。

空色した厚い洋紙に、鉛筆で書いた遺書であつた。その一通は、この海港の都市で、ある小さな銀行に勤めてゐる彼女の一人の年老つた買主にあててあつた。

私の胸の中の、貴方と、

抱き合つて、この毒を唇

にあてる。

愛するF 時

明三のものにはそれだけが、ひどく亂れた字で書かれてあつた。明三は、幾度も繰返して、それを讀んだ。

『どうして、これを早く見せてくれなかつたんだ。』



『だつて、明日、これを持って行つてくれつて、言はれたんだ。だけど、俺あ妙だからちつとも寝ないでると、此女は、夜明方になつてから、ひどく苦しみ出して、そんなになつてから、今すぐあの人を——お前を——呼んで来てくれつて言つたんだ。』

少年は、泣きながらくどくどと言つた。

『然し、どうした事だらう。』

『ハ、ハ、ハ……。』

茂は、突然笑ひ出した。

『お前は、やつぱり馬鹿だな。そんな事を、もう此女は、死んだのよ。』

『だから、どうしてかと、考へてるんだ。』

明三は、然し何か別な事を考へてでもゐるやうに、鈍くさく呟いた。

『ふん、ちあ考へてみた方がいゝや。俺は、そこへ、銀行へ行つて来る。』

少年は、彼からその手紙を引たくつて、走り去つた。彼は、凝然と立つてゐるに忍びない。で身を跳くやうに、走つた。明三は、茫然屍の側に坐つてゐた。然し、彼は、何を考へてもゐなかつた。無論自分の考を纏める事も出来ない程感亂して、宛然毒でも呷つた人のやうに青ざめた顔をしてゐた。

てゐた。

彼は、そうつと手をのべて、屍の脛に觸つてみて、またわなわなと慄へた。それから、自分もその女の側に横たはりながら、その顔にかかつてゐる髪をかき上げて、慄へる指で撫でた。そして、ずつと顔をすりよせて、何か叫くやうにその頭を抱いて泣きながら無限の哀愁に虐まれてでもゐるやうな、暗い惨めな顔をして、涙を流した。

涙は、死んだ彼女の頬に滴つて、床に落ちた。彼は、恐ろしく長い間、さうしてゐた。彼には然しその間、時間と言ふものがなかつた。いろんな傷ましい想念が、頭の中に亂れ混つて慄へてゐた。歸つて来た茂は、慄えたやうに扉口で立止つてしまつた。そして、怯々と彼の側へ歩み寄りながら慄へ聲で言つた。

『お前、どうかしたのか。』

そして、そつと彼の肩に手をかけた。明三は、顔をあげて涙の溜つた眼で彼を見た。然し、一言も口をきかないで、起上つて壁の方へ後退つた。

『今、あの人死骸を引取りに来ると言つたよ。』

『然うか。ちあ行かう……。』



明三は、陰気な沈んだ聲で言った。少年は、喰入るやうに彼を見つめてゐたが、急にまた嗚咽しやくわくして泣き出した。

四七〇

『俺は、俺は、もう行く所が、無さ……。』

『そとへ行かう……。』

明三は、彼の肩に觸つた。

少年は、何も答へなかつた。そしてだんだん激しい聲で泣きながら、身を悶えた。

明三は、惱ましげに長い間彼の側に立つてゐたが、遂にそこを離れ去つて出た。

戸外へ出ると、彼は褌衣の衣囊から、彼女の贈つた小さな時計を出して耳にあてて、その音を聞いた。それは、彼女の慄へてゐる心臓のやうに、憎えた弱々しい音を立ててゐた。

明三は、それをちつと見つめて唇にあてたが、力なくまた懐中へ納めた。

#### 四八

明三は、絞首架を負ふ者のやうな、哀れな俯れた姿で宿へ歸つて來た。

雪子は、疲れ果てたやうな眼を壁に瞪いてゐたが、彼がは入つて行つても、然うしたまゝ黙つて

ゐた。明三は、叱られるやうに、そこに跪いた。

『あの女おんなの所に、ゐたんでせう……。』

長い間を経てから、彼の方へ顔も向けないで、彼女は痙攣けいれんた聲で言った。

『あの女おんなの所に……。然うです。あの女おんなは、死んだんです。』

明三は、吃りながら、慄へる聲で言った。

『死、死んだ……。死……。あゝ、何だつてそんな事を……。私だつて、もう死ぬのに……。』

彼女は、慄へる聲で獨言のやうに言ったが、急に腹立しげに叫んだ。

『嘘、それは……。嘘よ……。』

明三は、痺れたやうな顔をしたが、一言も物と言ふ事が出来なかつた。

『貴方は、私の、死ぬのを待つてゐるものだから、……。そ、そんな……。事を……。』

遂に彼女はきれぎれに泣きながら泣き出した。

菊子は、何所かから、息を切しながら走つて來た。そして明三を見ると憎えたやうに立竦んだが、きれぎれな早口で叫ぶやうに言った。

『寺の、小母さんが、死んだんだつて、ね……。兄さんは……。』

四七一



『知ってるよ……。』

四七二

明三は、弱々しい聲で言った。

『嘘！ 嘘なんだわ……。皆、そんなこと……。菊ちゃんは、何所に、遊んでたの……。そんな話を聞いて……。』

雪子は、身悶えするやうに言った。

『私、……。兄さんを、索ねて歩いてたのよ。そして、あの茂に……。』

『いゝえ、兄さんは、もうずつと前に歸つてるのよ。』

少女は、悲しげに黙ってしまった。雪子は、嗚咽しながら、意地悪く言ひ続けた。

『そして、私、私には、薬も服ましてくれないのよ……。私……。』

『姉さん、堪忍して……。ね。私、悪かつたの。私……。』

菊子は、おろおろしながら、泣くやうな聲で言つて、すぐに散薬を出した。雪子はまた、オブラートが破れたと言つて、泣いて、少女を苦しめた。事實、それは自分の齒で破つたものなのに……。そして、菊子の飲ましてくれた水に咽せて、それを手で押のけて、哀れつばい聲で言ひ出した。

『皆、私を、早く死ねばいゝと思ふから……。こ、こんなに……。』

『そんな、姉さん……。然うぢあないんだけど、だつて……。私……。』

菊子は、壁の方へ向いて、両手で顔を掩ふてしくしく泣き出した。

『貴方は、もう私には、口もきいて下さらないのね……。そして、そして……。』

暫らくしてから、雪子は、涙の流れる顔を振り向けて、黙つて俯れてゐる明三に言ひかけた。

明三は、この惨めに悶えてゐる女の手を、固く握りしめてその上へ涙を滴した。

『雪さん……。そんな、そんな……。』

然し、彼は、もう言葉を續ける事も出来ないで、唇を慄はして臉に満ちた涙の底から、彼女を凝然と見つめた。

夕方になると、雪子は異つた人のやうに、静かになつた。彼女は、明三の腕の中で、嗚咽きながら、不安な眠りに陥ちて、短い眠りから覚めると、青白い顔をあげて、凝然とそこに坐つてゐた彼を見て、弱々しい聲で言つた。

『あの女は、眞實に死んだんだわね……。』

『眞實に……。毒を飲んで……。』

明三は、彼女の眼に見入りながら言つた。

四七三



『私、今會つたの……。』

雪子は、寂しい顔をして言った。

『會つた。……？ 何所で……。』

『何所だか知らない、暗い所よ……。あの女は、青ざめた顔をして、唇が血みどろになつてるの……。』

彼女は、重い頭痛でもするやうに、そこで口を切つて低く呻くやうな息を吐いた。明三は、憎えたやうに、彼女の眼に見入つてわなわなと慄へ出した。

『貴方、あの女の所へ、行かないの……。』

暫らくしてから、彼女は言ひ出した。

『……。』

明三は、何か考へに沈みながら言ひ出した。

『行つてらつしやいな。そして、私を悪く思はないやうにつて、……さう言つてね。あの女に。』

菊子は、涙ぐんだ眼をあげて、訊ねた。

『誰に……。』

『あの女によ……。』

『だつて、死んでるのに。』

『でも、解るのよ。いゝの……。言つて下さいな……。』

彼女は、遠い所を見つめるやうな眼をして言った。明三は、物思はしげに、彼女の顔から眼を離さないで黙つてゐた。

『でも……濟んだら、すぐ歸つてね。私も、寂しいのよ。』

『えー。』

明三は、愁に沈みながら、何か思ひ惑つてゐるやうに立上つた。そして、暫時そこに立つてゐたが、遂に歩き出した。

然し彼は、宿を出て一つの街角を曲らないうちに、葬儀會社の黒塗の靈柩馬車に出會つた。老害れた、長く毛を垂れた瘠せた灰白色の小さな馬が、それを挽いてゐた。

明三は、立止つて路傍に避けて俯れた。

その馬車の後から、——聲をあげて泣きながら跣足で走つて來た茂は、彼を見つけると、その手を掴んでむやみに引ばつた。



「これが、あの女だよ。」

四七六

「然うか。」

「行かう。」

「何所へ行くんだ。」

「焼場へ……。」

「俺は、後で行くよ。それぢあ。」明三は、沈んだ聲で言った。少年は、そのまま彼を捨てて走り去つた。

彼は、二十歩ばかりその後をついて歩き出したが、また立止つてしまつた。そして、D寺の方へ行きかけたが、また立止つて遂々悄々とまた宿へ歸つて來た。

四九

雪子は、唯一人で、薄暗い室に寝てゐた。

「あら、歸つて……。」

「えい。」

明三は力なく其所へ坐りながら言つた。

「どうしたの。」

「あの女は今、馬車で火葬場へ行つたから。」

「然う……。あのね、私そつと貴方に話し度い事があるの。起して下さいな。」

「何を……。誰もゐないよ。」

「だつて……。ね、起して下さいな。」

「きくちゃんは……。」

「私、知らないわ……。」

明三は、彼女を抱へ起した。

「あのね。」

雪子は、彼の腕の中で言つた。

「私、……。」

「何、……どうしたの。」

「だつて、恥かしいから……。」

四七七



『言つて御覧……。』

『ちやよ。』

そして、眼を閉つて彼の唇に、接吻した。

『ね、兄さん……。』

その時、戸外から歸つて來た菊子は、愁はしげに明三に言ひかけた。

『何……。』

『ほら、あの……。薨よ。』

『どうしたの……。』

『姉さんが、見たいつて言ふの……。』

『もういゝのよ。菊ちゃん。いらないんだわ……。』

雪子は、彼から顔を反けて言つた。

その夜彼女等は、暗がりの中の白い花のやうに、穩かな眠りで睡つた。明三は、幾度も眼を覺した。そして、溜息を吐いては、何かに魔はれるやうにきれぎれな事を考へた。彼は、唯一人黒い苦惱の花のやうに、彼女等の側に横たはつてゐた。

次の日、茂が、飄然と惨めな疲れはてた態をして、やつて來た。

『や。』

『何うした。』

明三は、起上つた。

『お前に話したいんだ。』

『然うかい。』

彼が出て行くと、少年は懷中から紙片に包んだ白骨をとり出して彼に見せた。それは、細長い折れた肋骨のやうであつた。

『何したんだ。』

『これは、あの女の肋骨だよ。』

明三は、手にとつてしみじみと見てゐたが、眼を潤ませて弱々しい聲で言つた。

『俺に、これをくれ……。』

『いけねえ。』

少年は、それに手をかけて言つた。



『くれよ。金をやる。』

『いけねえ。』

『ちあ、お前どうするんだ。』

『持つてるのよ。』

『然うか……。』

明三は、力なく言つて、密とその骨に接吻した。

『何だ、お前……。そんなばかな事をするもんぢあねえ。』

少年は、不思議うに彼を見て言つた。明三は、何も答へないで、壁の方を向いて泣き出した。

『何だ、お前、泣いてるのか。おし……。』

少年は、彼の肩に手をかけて揺つた。

『どうしたんだ……。』

『……。』

明三は、何も答へないで嗚咽いてゐた。

『……。』

『だつて、俺あ、辛つとこれだけ盗んで来たんだぜ。皆さらへて、あの銀行屋が持つてつてしまつたんだ。ほら、半分でいゝだらう……。』

少年は、音を立ててそれを折つた。そして、彼の手につきつけた。

『要らないよ。』

『馬鹿だなあ……。半分だつていゝぢあねえか。遣るつてのに……。』

『然うか。』

明三は、それを受取つて自分の衣囊へ入れた。

『ちあ、俺あ行くぜ……。』

『何所へ、行くんだ。』

『寺へ……。その外、何所へ行く所がある……。』

『然うか……。』

明三は、固く彼の肩を抱きしめてその髪へ接吻した。

『お前は、おかしい人間だなあ……。』



茂は、どろじろと彼を見て、歩き出した。

四八二

雪子は、またひどく不機嫌だった。彼女は、自分の枕元の花が萎れて居ると言つて、泣き出した。

『私、早くこんなになつてしまへばいいの……。だから、きくちゃんは、かうしてるんだわ。』

少女は、傷口に觸られたやうないたいたしい顔をして、わびた。

『私、悪かつたの。姉さん堪忍して……。』

『もう直き、私死ぬと思つて、唯そんな事だけ言ふのよ。菊ちゃんは。』

『いゝえ……。』

『然うよ。だつて、だつて……。あゝ、私は、どうしても死ななければならぬんだから……。いゝわ、いゝわ……。』

明三は、虐まれるやうな惨めな暗い顔をして、彼女の側に坐つた。雪子は、泣きながら、狂人じみた手で彼の胸を抱いて、その唇に接吻した。

『私、私は、死に度くないのよ。ね、ね……。』

そして、惨めに身を悶えるのだ。明三は、その肩を抱いて子供にするやうに、彼女の髪を撫でてやつた。彼女は、事實小兒のやうに苛立つて、泣いて訴へるのだつた。

そして果ては、その腕の中へ重たく頼れ込んで眠つてしまつた。

その夜から、果てもなく長いやうな、暗い雷雨が降り続いた。

六日も、七日も、八日も……。黒い糸でも吐くやうな陰暗な雨は、地を凍へさせて降り続いた。

彼女は、その間中、不安な焦燥の中に、惨めな苦惱をくりかへして泣いた。

一度なぞ、身悶えして、そこにあつた散薬の包を、壁に投げつけて泣いた。明三は、殆んど夜と日も、彼女の側にゐた。菊子は、唯怯々とこの女の眼に見入りながら、何もかも言ふまゝにしてやつた。

『ね、兄さんも、菊ちゃんも、私をほつといて、何所へでも行つて……。私、獨りで死ぬのよ。』

彼女は、そして聲をあげて泣くかと思へば、すぐにまた寂しい顔をして、總ての事を彼等に許しを乞ふた。

『ね、もう些しよ。その間、許して下さいな。兄さん。菊ちゃんもね……。』

## 五〇

暴風に虐まれて、狂ほしく悩んでゐる花のやうな、長い惨めな苦惱の日が続いた。

四八三



彼女は、全一日も、一言も口をきかないで、不気味なきらきらした眼で、凝然と壁を見つめて低く呻いてゐたりした。

そして發作的に、しくしくと泣き出すのだつた。

雲が止んだ二日目に、彼女は急に静かになつてしまつた。

彼女は、午後に明三の胸に頭をつけて眠つてゐたが、眼をさますと、淋しい眼をして彼を見た。

『私、死んだ夢を、見たの……。』

彼女は、弱々しいきれぎれな聲で言つた。

『きつと、死ぬのよ。』

『……………』

『月の世界つて、どんな所……？』

『それはね……。唯恐ろしい火成岩の灰色な山と谷ばかりなんだつて……。』

明三は、彼女の顔から總てを讀まうとして、苦しみながら、言つた。

『暗いんでせう……。』

『えゝ。唯あんな青ざめた薄光があるだけなんですと……。』

『然う、私、死ねばそこへ行きさうに思はれるの……。』

彼女は、また口を噤んでしまつた。

それから二時間も経つと彼女は暗い水の底へでも沈んで行くやうに、深い昏睡に陥ちてしまつた。薬を買ひに行つた少女は、歸つて來ると、そつと彼の側へ寄つて來て訊ねた。

『眠つてるの……。』

『ひどく、悪しの……。』

『さう。』

少女は、暗い顔をして、蹲まつた。

雪子はその時ふと眼を覺してけんとさうに彼等を見た。

『姉さん。お薬よ……。』

『いゝや、菊ちゃん、もういゝの……。お薬は……。』

『何故。』

『濟まなかつたわね。もう、何もいらぬのよ。』

雪子は、詫るやうに少女に言つて、深い息を吐いて明三に言つた。



『お経を讀んで下さらなくて、……何か。』

明三は、寂しい低聲で遺經を讀みはじめた。彼女は、眼を閉つて、暫らく聞き沈んでゐたが、聽てまた深い昏睡に陥ちた。

青ざめた蠟の光りは、慄へながら垂死の娘の顔を照した。彼等は、その顔の上に顔を集めて、黙つて凝視めた。少女は、涙ぐんでは何か言ひたげに明三を見た。然し、彼女は、何も言ふことが出来なかつた。

夜の寂寞と暗がりとは、音もなく彼等を圍繞してゐた。暗い、生物には解らない寂しい影が、蝕ふやうに彼女の顔を浸した。彼女の生命は、細い白蠟の、音もなく燃えくちて行くやうに、衰へて行つた。

二度目に、彼女は身を慄はしながら、眼を覺した。彼女は、惱ましげにその眼を睜いてゐたが、盲かなぞのやうに手探りで明三の手を探し求めた。

『どうしたの、雪さん……。』

明三は、慄へる聲で言つた。

『手を……。きくちゃん……。』

少女は、泣きながら、雪子に手を延べた。彼女は、菊子の手を固く握りしめ、明三の指を自分の唇にあてた。

『兄さん、さよなら……。きくちゃん……。』

一言、一言きれぎれに、細い聲で言つて、遂に頭を垂れた。少女は、わなわなと慄へて泣きながら、彼女の唇を、カップの水で濡した。

明三は、彼女の肩を碎ける程も力をこめて抱きしめてその顔に接吻した。

雪子は、微かに眼を睜いて、懐しげに、しみじみと明三に見入つた。そして、微笑むやうに唇を動かして、再び眼を閉ぢてしまつた。聽て彼女は地に頹れ落ちる花のやうに、靜かに頭を垂れたのだつた。

菊子は、床に打伏して、聲を忍んで慟哭した。明三は、化石したやうに、茫然とその息の絶えた顔を見つめてゐた。彼女は、消えかかつた蠟燭の灯光の下に、死んだ花のやうに音もなく、彼の腕の中に頹れてゐた。

慄へる灯光は、遂に闇の唇に吸ひ込まれる。

そして、汚れた窓硝子を透して流れ入る、青ざめた月光が、この死んだ女を抱いた者と、ひれ伏



して泣いてゐる少女との上に流れた。

明三は、屍を横たへて、そこに立つてゐた白い花を撈つてその花瓣を彼女の上に撒いた、そして慄へる低聲で、無常經を誦みかけたが、すぐに止してしまつた。それから、彼女の側に坐つて、默然として俯れ、遂に床に額をつけて拜跪した。彼と、菊子とは、より添つて屍の側で、夜を明した。

彼等は、その間中一言も口をきかなかつた。そして、殆んど代り代りといふ程、そつと屍の顔を覗いてみては、遠い月を見上げた。

夜があげると、聲面をして、歎息を吐きながら、宿の老婆がやつて來た。  
『困つた事だ。』

彼女は、何かぶつくさ口叱言を吐いて行つてしまつた。磨師は、すぐにやつて來た。そして、何も言はないで黙つて屍の所へ跪いた。彼は、掌を合せて、凝然と屍の顔に見入つた。  
弱々しい光りが、死んだ彼女の顔を滲してゐた。

地に散り落ちた花のやうに、屍は永遠に然うしてゐるやうな姿で、そこに横たはつてゐた。その蠟色の顔は、寂しい憊れたやうな微笑を含んでゐるやうに見えた。白い花瓣は、撒華のやうに彼女

の屍の邊りに散らばつてゐた。

磨師は明三の顔を見ないやうにして、その手を固く握りしめた。

『棺も、それから……。』

彼は、自分一人に相談して出かけて行つた。

日暮方になつてから、棺が届いた。

彼等は、穩かに彼女の屍を、その中に横たへた。

少女は、泣きながら、彼女の好きだつた、白い「死のやうな匂ひの花」の花瓣をその上に振りかけた。

明三は、老醫師の、骨甕をその側に納めた。

『うけなう、お前は……。』

磨師は、何か言はうとしたが、彼の顔を見ると、黙つてしまつた。

彼は、宛然心臓に針を刺されでもしたやうな、痛々しい顔をしてゐた。

菊子は、驚ろいたやうに彼を見たが、急に彼の手を握つて、聲を立ててその足下に泣き伏した。

明三は、棺の中に横たはつた雪子の額に、最後の長い接吻をした。涙は、彼の眼から、屍の穩かに閉ぢた臉の上に流れた。



菊子は、その間中彼女の手に取縋つて、口の中でお別れを言つた。

棺は、遂に蓋で覆はれて、黒い覆の着いた低い車に積まれた。そして、磨師と、保険屋とに挽かれて、そこを出た。

寂しい葬儀の群は、日が暮れ落ちてからゞの共同墓地へ着いた。

墓坑は、共同墓地の北隅の草原の中にあつた。彼等は柩をそこへ降すと、溜息を吐いて、そこを離れ去つた。

保険屋は、車を挽いて丘を下りて行つた。磨師は、凝然と明三を凝視めてゐたが、遂に何か譯の解らない獨言を言つて、歩き出した。

明三は、力なく鋏を取つて、棺の上に土をかけ始めた。

陽の光りは、全く沈み盡して、灰色の低く垂れた空には、微かな歎息のやうな、薄光も漂つてゐなかつた。

菊子は、そこに踞まつて、両手で顔を掩ふてゐた。土は、音を立てて、柩の上へ頽れ落ちた。

明三は、幾度も手をとめては、暗い坑を覗いた。柩は、寂然として永久に黙つてゐた。彼は、また一鋏毎に喘ぎながら土をかけるはじめる。

寂しい風が、音を立てて地を襲つて来て、灰色の低く垂れた空からは地に暗い雲を降り濺いだ。寂しい慄へる白布のやうな残光は、夜の唇に吸ひ盡されて、死の掩布のやうな、黒い闇が地を掩ふた。

明三は、遂に墓坑を埋め終つた。彼は、茫然と雲に降られて躡まつてゐたが、頽れるやうにそこに跪いた。そして、顔を掩ふて啜り泣きし出した。

『歸りませう。兄さん。』

少女は、彼により添つて、その肩に手をかけて、言つた。

『……………』

『ねえ。』

『何所へ……………』

明三は、喉を締められたやうな、惨めな聲で言つた。そして、軀を慄はして地に泣き伏した。

『どうしたの……………？ 兄さん。』

少女は、怯々した顫ひ聲で言つて、彼の肩を掴んでそこへ跪いた。

明三は、地に頽れ伏して、顔をあげなかつた。



四光二  
彼女は、彼に取縋つたまま、不可解な悲しみに襲はれて、惨めに啜り泣き出した。  
暗い雲は、彼等の上に歎歎くやうに降りしきつた。夜は、永遠の寂寞をもつて、彼等の上に垂れ  
下つた。

大正十二年五月二十八日印刷  
大正十二年六月五日發行

(定價金貳圓)

■ 血の呻き ■

著者 沼田流人

發行者 東京市牛込區神樂町二丁目十一番地  
足助素一

發行所 東京市牛込區神樂町二丁目十一番地  
叢文閣

振替東京四二八八九番  
電話牛込二五七三番

印刷所 (印刷人)

東京市神田區宮本町五番地  
中正高橋治一社



290
305



終

